



セルビアと日本の 知的障害者支援施設交流を通した国際協力

精華町総務部企画調整課 奈良 道代

～福祉と国際交流団体の パイプを生かして～

京都府南部に位置する人口約3万7千人の精華町は、1980年代の関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）建設開始当初からの中核研究施設や企業の立地などを背景に、国際化に取り組んできました。一つの特徴として、今後の国際化を見通して設立された国際交流団体（国際交流のほか、教育、農業、福祉、経済等の分野の団体を会員とする民間団体）が、精華町と協力関係のもと、国際化の中心を担ってきたということがあります。このような背景から、福祉と国際交流の両分野のパイプを生かし、様々な団体の支援協力を得て、セルビアとの交流事業を実施しました。

1. セルビアからの訪問団受け入れの経緯

セルビアでは、20世紀末の政治的混乱により政治・経済が停滞し、失業率は18.9%（2014年／セルビア統計局）ときわめて高く、企業に障害者の雇用の余裕があるとは言い難い状況です。また、民間団体への政府の支援はほとんどなく、資金源に弱い団体が活動を展開していくには困難な状況にあります。

そのような状況のなかで、障害者家族らにより設立された知的障害者支援施設“NASAKUCA”は、障害者の雇用創出のために施設内起業を行っていますが、作業に従事できる利用者の増加や商品受注増加・競争力向上を目指して、独立行政法人国際協力機構（JICA）に協力要請を行いました。それを受け、平成26年より、シニア海外ボランティアとして経営指導を行うため、精華町出身の住民の方が派遣されました。

その後、その方から精華町障害者支援施設とNASAKUCAの交流の提案を受けました。そこで一般財団法人自治体国際化協会の自治体国際協力促進事業（モデル事業）を活用し、平成27年度、セルビアからの訪問団を受け入れることとなりました。

2. 受け入れ計画の策定

精華町への要請は「障害者教育（商品開発、障害者の活動計画）」と「施設のリーダー同士の関係性構築」でした。そこで、障害者福祉に関するシステムづくりにおいて中核的な役割を担う「障害者地域自立支援協議会」の参加団体の協力・知見を得て、障害者支援施設などの視察や意見交換を軸とする計画を立てることとしました。そのほか、NASAKUCAのプロジェクトについて、精華町及びセルビアのベオグラード大学と連携関係にある同志社大学にも、アプローチやステップについての助言や支援協力を得られるか相談を行いました。

計画を立てる際には、精華町がいかに「基礎自治体」ならではのネットワークの強みを生かした取り組みができるかを重視しました。

3. 訪問団の来日

（1）障害者支援施設などの視察

①重度の方も生き生きと働ける作業所施設

ここでは、重度障害でも仕事ができる配慮がなされていました。例えば、手を上下に動かす癖のある方には、器具を用いて紙の原料となる木を叩き潰す作業をしてもらい、絵が得意な方には、国際的な絵画展への出展機会を提供し、才能の芽を育んでいき活躍の機会を創出しています。セルビアでは、重度の障害者は、最低限の生活はできても、「働く」可能性自体が見出されることがないとのことで、視察団は「母国でも伝えたい」と話されていました。

②日本のモデル、地域の小さなグループホーム

住宅街に建ち、共同の台所やリビング、風呂、個室を備え、一見シェアハウスのようにみえるグループホームは、「地域で暮らすように」ということを目指した施設です。セルビアではへき地にある大型入所施設が一般的とのことで、訪問団はこのような日本のモデルに関心を寄せていました。



③一般就労へのステップを支援する障害者就業・生活支援センター

障害者就業・生活支援センターでは、障害者の一般企業などへの就職後、双方のミスマッチを防ぐため、「グループ就労」という形で障害者複数人を一般企業に派遣しています。企業側は、一定期間の仕事ぶりや適性を判断した上で障害者を採用します。

④施設と地域の繋がりを大切にした入所施設

ここでは、災害時に地域住民が利用できるスペースや風呂を設置したり、施設のバスを地域の子どもの通学用に提供しています。また、かつての地域産業 視察の様子であった茶の栽培を障害者の職として復活させるなど、施設と地域のつながりを大切にした取り組みが行われています。



(2) 関係団体への訪問

①日本庭園管理・育苗プロジェクトに向けた事業者訪問

NASAKUCAは、日本大使館からの受託業務である「日本庭園の改修・管理業務」および「育苗」の2事業の開始を目前に控えていました。前者については、本町にある日本庭園の管理者から、庭園に関する知識や桜など植物の育て方の話を聞きました。また、後者については、種苗会社から、その種苗会社のヨーロッパ拠点からセルビアへの種の入手ルートや栽培方法の話を聞きました。

②大学への訪問

NASAKUCAでは、障害者福祉教育の実習の場として、セルビア国内の大学にNASAKUCAの作業施設を利用してもらうよう提案することを計画しています。そこで、プロジェクトの実施にあたり、精華町及びベオグラード大学と協定関係にある同志社大学に対し、持続的な支援協力を得られないか相談をしました。

(3) 意見交換

今回の訪問団の受け入れを契機に、セルビア国内に行政への要求活動を行える障害者支援組織を設立することを目標としていましたが、訪問団と視察先への聞き取りを通し、協会が存在することが判明しました。しかし、同国の協会は政府組織のため、政府の意思が強く働いており、民意が反映されているとは言い難いこと



意見交換会

が分かりました。その事情を考慮した日本側の障害者支援団体からは、「モデルとなるNPOの取り組みを国内に広めていくこと」、また「NASAKUCAがリーダーシップをとっていくこと」といったアプローチが提案されました。さらに保守政権のもと福祉施策を前進させてきた日本の例を挙げ、「政策反映力のある政党との繋がりを持つこと」、また「国民の注目が福祉に集まるタイミングを逃さないこと」といったアドバイスがなされました。

そのほか、障害者自立のための職に関しては、日本側の障害者支援団体から、「競争力をつけるために、本物・安心志向（無添加等）を大切にしている」、また一般企業への就職促進のための働きかけとしては「“仕事を受ける代わりに雇用を求める（ギブ＆テイク）”の関係性を築くようにしている」との意見がありました。これに対しNASAKUCA側からは、無農薬野菜などには注目するが、高価で現在の同国経済状況下では難しいとの意見が出され、経済事情と密接な関係があることが分かりました。

4. 成果および今後の展望

訪問団がセルビア帰国後に行った現地での報告会には、大学教授や障害者家族ら約20名が参加し、訪問団からは、日本の障害者教育や福祉環境などについて説明がなされ、今後の方向性について活発な議論が交わされたと聞いています。

また、NASAKUCAでは、視察先を参考に、新たに障害者が野菜を栽培し、レストランで提供するという計画にも着手しています。付加価値をつけるために水耕栽培とし、フードセキュリティーにも取り組むとのことで、今後の方向性を定め、着実に一步が踏み出されていることが窺えます。

今後の支援としては、水耕栽培の専門家や、ケアマネージャーの派遣などへの期待の声が上がっています。同時に、支援終了後の自立運営のために現地のカウンターパートを育成することも大きな課題です。社会背景との関連性への理解をさらに深め、現地の調査を行い、課題認識・目標設定を行っていくことが次の一步に不可欠と考えます。幸い、今回関わっていただいた障害者支援団体からは、今後も要請があれば可能な協力はしていきたいという声をいただいています。今回の訪問団受け入れを通して得られた経験を生かして、微力ながら、地域の国際協力の風土醸成に尽力していきたいと考えています。